

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

三崎綱範

福岡県の「弥草文書」の中に、次の史料があります。「宇和表干戈の儀、無事に申し談じられるの由に候、尤ももつて肝要に候、よつて豊筑発向の儀につき、河野通直別して入魂候、豊綱御同意の条、その国一統の儀に候、本望候、弥急度兵船馳走に預かり候様、申し調えらるべく候、猶年寄共申すべく候、恐々謹言」

日付は、天文元（1532）年と思われる12月3日で、豊後の戦国大名大友義鑑が「三崎安岐守」に宛てた書状です。三崎安岐守は、四国伊予国の三崎（愛媛県伊方町）を本貫とする武士です。瀬戸内海と宇和海の二つの海を割くように延びる、日本一長い佐田岬半島の先端近くに

ある小湾に、中世から港を設けて活動していたのが三崎氏でした。

書状は、戦国時代の合戦準備に関する内容です。「豊筑発向」、つまり義鑑が、大内義隆が統治する豊前・筑前方面に軍を進める、北部九州での軍事行動に際し、四国伊予の諸勢力への協力依頼と同盟関係の締結を企図していたことが分かります。義鑑はまず、湯築城（松山市）を本拠とする河野通直と「入魂」の関係、すなわち軍事同盟を結びます。さらに、伊予南部の大洲城（大洲市）の宇都宮豊綱とも「御同意」の関係を結び、いわゆる大内氏包囲網の形成を策じたのです。

伊予の有力大名がこぞつて大

友方に与する状況の中、義鑑は三崎安岐守に対しても、宇和（愛媛県南西部）方面での「干戈」（合戦）の沈静化を期すとともに、海上での戦いに兵船を出して手柄を挙げよう、指示したの

中世三崎氏が活動した三崎の海（愛媛県伊方町）



です。この書状を受けた「安岐守」とは、三崎綱範と思われる

また、その数十年後の16世紀後半には、三崎統範なる人物が、大友氏の家臣として記録されています。統範の「統」の字は、義鑑の孫で16世紀後半に当主となった大友義統の偏諱（功績ある家臣に主君の名の1字を与えたもの）です。この時期の三崎氏は、大友氏の被官（家臣）として、年頭に豊後府内の大友館まで参上し、太刀と刀を献上して接待を受けていました。

四国最西端の佐田岬に本拠を置く三崎氏は、豊予海峡を隔てて九州の佐賀県に対峙する地理的位置を利用し、海上交通の要衝を押さえる海の武士団でした。綱範ら16世紀の三崎氏当主は、対岸の有力大名大友氏の傘下に入り、合戦時には水軍組織の一員として活動しながら、戦国時代を生き抜いたのです。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載

豊予海峡に生きた海の武士団